

慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科
システムデザイン・マネジメント専攻 修士1年
岩澤ありあ

15世紀に造られた天動説に拠る天体の動きと時間を表す天文時計が壁に飾られている旧市庁舎がある街。第61回国際宇宙会議は世界で最も有名な天文時計があるチェコ共和国・プラハで開催されました。時計が時を刻むように、IAC2010学生派遣プログラムへの参加は私の心に一生の思い出を刻んでくれました。今回の学生派遣では「JAXAの学生派遣メンバーで90分間、自身の研究や活動を通じて日本の宇宙開発の取り組みを他国の参加者に発表する」という事と「プラハの日本人学校で出前授業を行う」という2つの大きなイベントがありました。派遣が6月に決定し、会議が開催されるまでの3ヶ月に及ぶ準備期間はとても充実していました。

チェコの民族舞踊や賛美歌が歌われるオープニングセレモニーから始まり、各国の宇宙機関や航空宇宙産業を支える企業ブースの展示、宇宙に関する講演など盛り沢山の内容が続く1週間。本や映像で今まで見聞きしてきた宇宙の世界が目の前に広がり、実際に宇宙開発を仕事としている人が世界には大勢いるのだと実感することができました。このプログラムでは海外の実力と広さを知ると共に、今後において切磋琢磨できる国内の仲間と出会えたことが何よりの宝物です。

国際宇宙会議では、宇宙開発は常日頃イノベーションが求められ、相手にアイデアを伝えるためにコミュニケーションスキルを磨くことが大切だと教わりました。私は外国人と会話をする際、話している事は理解できても、相手の会話の展開が早く、思うように会話の輪の中に入ることが出来ない悔しい場面を幾度も経験しました。海外の方のプレゼンテーションを聞いていて、本を引き合いに出して発表が展開される事が多々あるということに気が付き、語学の勉強に加えて、本を読んで教養を深め、相手に伝えたいことを持つ事の大切さを学びました。コミュニケーションに対する心の葛藤はありましたが、Masters of Mastersという各国宇宙機関代表者のディスカッションで述べられた「性別、国籍、哲学、発想の多様性は私たちを強める違いだ」という言葉に勇気をもらうことが出来ました。また、会議全体で感じた事は、宇宙開発を先進国のものだけではなく、発展途上国にも技術を紹介して宇宙開発を盛り上げていこうとする各国の兆しが強いということです。

私にとって今回の派遣で楽しみにしていたイベントはプラハの日本人学校訪問でした。学生メンバー全員で授業の構成を一から考え、大勢で一つのものをつくりあげるという行程がとても良い思い出です。授業のフィナーレとして、3機の水ロケットを校庭で打ち上げました。校舎の屋上に届くまでの高さに水ロケットを打ち上げ、観客から歓声が湧き起こり生徒のキラキラした瞳を目の当たりにした時、準備の労力を上回る喜びを心底感じる事が出来ました。「宇宙教育」の意義は、「宇宙」への興味という共通の軸を通して、幅広い世代の人達が交流できる点にあると私は考えています。今後も引き続き日本宇宙少年団の活動等を通じて宇宙の魅力を伝えていきたいと思っています。

現在の目標は、いつの日か国際宇宙会議に再び参加することです。今回は周りの方に宇宙開発について親切に教えていただくばかりでしたが、いつかは私自身が経験を踏まえた上で宇宙開発について話せるようになりたいと思います。NASAの長官は次の言葉を学生皆に伝えてくださいました。“Focus on learning. Put everything in your head. Be global, be confident, be the best.”この度の学生派遣プログラムにあたって、私たち学生の目の届かないところで尽力してくださった方々、JAXA宇宙教育センターの方々、並びに活動を支えてくださった皆様に心より御礼申し上げます。

